

抑留生活さまざま

岩手県 土川 清

十九歳で入隊。初年兵の訓練を終えて満州に渡り、チチハルで関東工兵幹部教育隊甲種幹部候補生第三期生として、昭和二十（一九四五）年七月一日に入隊。一カ月半訓練を受けてハルピンで終戦を迎えた。

武装解除したあと、屋根のない貨車で海林ハイリンに行き、貨車を乗り継いで旧ソ連に入り、ホルモリン収容所に入る。

海林には、満州、北支、蒙古にいた日本兵らが集められ、千人単位で作業隊を編成し、シベリア各地に送りこまれた。その数は五十五万人に上るといわれる。

貨車を乗り継いで旧ソ連に入ったとき、ハバロフスクから南下して帰国するものとはかり考えていたが、列車が北に向かったため、だまされたこ

とに気づいた。

コムソモリスクから収容所のあるホルモリンまでは三、四日歩かされた。

十二月の酷寒の中で野営し、寒さと栄養失調で一人二人と死んでいき、ソ連兵の掠奪が行われた。収容所では、独ソ戦で撤去されたバーム鉄道（シベリア鉄道）の改良復旧工事が主な仕事だった。森林の伐採、木材の馬での搬出、鉄道の土木工事に従事した。

シベリアは、五月中ごろから六月が春、夏は七月のわずか一カ月間で、八月は秋、九月中ごろから氷が張り冬に入る。

零下五〇度になるときに二、三回あり、体を動かしてないと生き物が凍りついてしまう寒さを抑留生活で体験した。

作業を終えたあとも暖房のための森林の伐採、飲食に使う氷の切り出しなどの作業があり、夜の十二時ごろまで働き、起床は午前六時だった。

一回分の食糧は、コーリヤンとすまし汁のよう

なスूपしか与えられなかった。

衛生状態が悪いためシラムがつき、かゆさのために熟睡できず、栄養失調と睡眠不足で数多くの同輩が死んでいった。

少しでも飢えをしのぐため木の葉を食べたり、車から転げ落ちたジャガイモを夜中に拾って食べた。

酷寒の真夜中に、必死の思いでジャガイモを拾い、氷を溶かすために飯ごうで煮たところ、馬糞だったという笑うに笑えない話がある。

帰国が許されたときは、これ以上働くと死んでしまうというところまで体が衰弱していた。

体重は四八キロで、あばら骨が見え、足首からももまでが同じ太さだった。

貨物船で帰国した。

シベリア抑留記

熊本県 家入 壯介

ハルピンにて武装解除

私の軍隊生活は、昭和十八（一九四三）年十月十五日、熊本工兵第六連隊に入隊した日から始まった。そして直ちに、北滿のハイラルの関東軍工兵第一一九連隊に派遣され、そこで初年兵の基礎教育をうけたのち、昭和二十年七月一日、甲種幹部候補生としてチチハルの関東軍工兵幹部教育隊に入隊した。

教育隊では、滿州、朝鮮、中国の各部隊から集められた約百三十人の候補生が、工兵の幹部将校となるため、毎日厳しい訓練が続けられた。

昭和二十年八月九日ソ連軍が滿州に侵入した日は、ことのほか炎熱の日であった。私達はフラルギの嫩江において鉄舟をつかった架橋の訓練中であつた。午後の訓練が始まって間もないころ、浜